

金剛幢下竺仙梵僊の渡来

西尾賢隆

はじめに

私は先に「鎌倉期における渡来僧をめぐって」(『日本歴史』四九一号)と題して、南宋末から元にかけてのわが国への渡来僧について、少しく亡命僧といえない点を考えてみた。その渡来僧の三類型のなかで、第三の外交使節としての一山一寧については、「元朝国信使寧一山考」(『日本歴史』五〇九号)において、東アジア史のなかで、その史的意義を追究した。

いま表題に掲げた竺仙梵僊は、日本からの招聘によって東渡する明極楚俊に勧められ同船したものであり、渡来僧の第二の類型(日本からの招聘状によるもの)に入れてよいであろう。彼らの渡来は、モンゴル襲来以後の北条得宗体制が崩壊せんとする直前の鎌倉極末のことに属する。従来、玉村竹二氏や今枝愛真氏らにより、五山文学史上、取り上げられてはいるものの、いまだ竺仙を主題にしたものはない。今ここに彼をメインとすることにより、その史的意義を考えてみたい。

一 元朝治下での竺仙

帝昺が陸秀夫に背負われて厓山（広東省江門市新会県）の海に入水し、宋室が完全に滅亡したのは、祥興二年（一二七九）のことであった。それから十四年目の至元二十九年（一二九二）に生まれたのが竺仙である。彼は十一月十五日、明州象山（浙江省寧波市象山県）の徐氏の子として生を受けた。祖父は明州儒学の学正で、父の応は德行を包み隠して仕官しなかった。母は欧陽氏の出で、三子を生み、竺仙はその末っ子である。祖父が州学の教官であったことは、宋代地方における学校教育の一端を担っていたことになり、士大夫階級の一員といえる。父親の徐応が仕官しなかったのは、征服王朝である元朝に仕えるのを潔しとしなかった為であろうか。「竺仙和尚行道記」〔竺仙録〕巻中にわざわざ「隠徳不仕」と記すことは、読書人としての教養を積んでいたことを示すものであろう。六歳（大徳元年、一二九七）になると郷校に入り、一年もしないうちに韻書や反切に通じ以前から習っているようだったという。人が般若心経を読んでいるのを聞くと記憶してしまい、体は痩せ細り、葷腥を食べようとはしなかった。このようなことから両親は俗世間向きの人間ではないことを見てとり、十歳（大徳五年、一三〇二）を越すと出家を許すことになる。郷校つまり小学への入学は、普通は八歳であったが、五歳で入学した例もある。竺仙は早くより将来の士大夫としての教育を受けたことになる。しかし、世俗での生活が性に合わなかったということになる。

モンゴル軍は南宋を完全に滅ぼしたあと、至元十八年（一二八二）には第二回目の日本遠征をし、翌年にはビルマ、チャンパを討ち、至元二十二年（一二八五）には安南国を討って大勝した。竺仙の生まれた至元二十九年にはジャワを討っている。クビライカーンにとって意の如くならなかったのは、日本討伐のみであって、第三回目の日本遠征を目論んだが実行に移すにはいたらなかった。孫の成宗が、平和裏に日本を元朝の体制下に服属させようと一山を派遣

したのは、竺仙の八歳（一二九九年）の時のことである。

十歳で出家した竺仙は、湖（浙江省湖州市）の資福寺の別派□源に從つて驅鳥となり、誦經すると流れるようであり、別派はその才能を重んじた。ここの驅鳥というのは、童行を指すとみてよいであろう。⁽³⁾十八歳（至大二年、一三〇九）のとき杭の靈山の瑞雲□隱に師事し、試經により度牒を受け、その師の虎巖淨伏の塔を礼して剃髮し、具足戒を受けている。なお、法兄の了菴清欲は、年十六（一三〇三年）の時、虎巖に依り、試經得度している。竺仙は度牒を受けて剃髮し沙彌となった段階で、国家から僧と認められ、一般の戸籍から僧籍に移籍されたことになる。竺仙がどこの戒壇で具足戒を受けたか分からなく、何歳のことかもはっきりしないが、十八歳で剃髮していることからすると、規矩の通り二十歳でのことと考えてよいであろう。その後、各地を遊方することになる。

まず最初に晦機元照に淨慈寺で拜謁した。晦機が淨慈に住したのは、至大元年（一三〇八）から延祐元年（一三一四）までの間であるから、竺仙の師事したのは、至大四年以後の事であろう。ついで天童寺の雲外雲岫に從い、開壽寺の商隱のもとでも数日留まっている。浙西に還ると、靈隱寺の元叟行端や淨慈の東嶼徳海に從つており、元叟には皇慶元年（一三二二）から延祐元年の間に師事し、東嶼には延祐二年に師事したものと考えてよいであろう。杭州虎跑寺の止巖普成に見えると、鎮海明珠の話を提示され認められているが、自分ではまだ穩当ではないとし、観音に早く明師にあり大事を決了することを祈っている。天目山に登り中峰明本に見えると、中峰は「奇なる道人」といい、字の竺仙についての説を作つて贈っている。竺仙が中峰に参じたのは、延祐二年か、三年春、もしくは五年以後のことであろう。⁽⁴⁾至治二年（一三三二）古林清茂が金陵の鳳臺山保寧寺に住すると、竺仙は千里の道をも遠しとせず参ずることになる。⁽⁵⁾古林から「你に三十棒を放す」と、印可された。清涼寺の藏主を掌ると、彼の道声が拳がり、江陰の白龍寺の招聘を受けたが、まだ為人する段階に達していないと断つた。のち東浙に還り、さらに揚子江中流域を遊方している。

竺仙が具足戒を受けたのち、各山の禪家に歴参して、ついに古林の印可を受け、さらに悟後の修行のため遊方したころは、元朝中期の頃に当る。最初、郷校に入って学びだした士大夫としての道を邁進したとすると、科挙試験を受けるのにちょうどよい時期にあたっていた。

元朝は旧南宋治下の江南の知識人に対して概して冷淡ではあった。しかし、知識人達の科挙制復活によせる熱い期待は無下に絶ち切ってしまうわけにもいかなかった。世祖期にも科挙開設の動きはあったものの実現にはいたらなく、ようやく元朝も中期の仁宗の時になって、開設されることになる。第一回の科挙が延祐元年に郷試、翌二年二月に会試、三月に廷試が仁宗によって行なわれた。これ以後、三年ごとに元末まで続いて行なわれたが、モンゴル人・色目人に比して漢人・南人への割り当て定員は少なく苛酷なものであった。⁽⁶⁾とはいえ、科挙の復活は、知識人達に希望を齎すものであり、元朝の末期に国家に忠節を尽して亡くなった進士の存在は、このことを雄弁に物語っている。

科挙を目指す予備的な存在から、選仏へと方向転換した竺仙は、当時の名だたる禅匠である中峰や元叟らに歴参し、古林の法を嗣ぐことになる。

二 竺仙の渡来

径山に登ると、明極楚俊が日本の招聘に応じようとしているところで、同行するように要請された。竺仙は仏乗つまり天岸慧広の十三年忌の陞座説法に際し、天岸と相知るようになった経緯から、さらに日本へ明極と共に海を渡ることになったことに話が及んでいる(『竺仙録』巻中、建長寺語録)。

一日径山に在り。忽ち日本の文侍者至り、言う。郷船福州に在り、明極和尚に宿昔の約有るを以て、取らんと欲するの時、明極山僧を挽き偕に行かんと欲し、不可とす。乃ち文に謂いて曰く、若し能く仙公を化し共に往かば、⁽⁷⁾

行かん。否ならば則ち然らず。且つ又た自ら山僧に謂いて曰く、汝此に於て但だ此の国の人汝を識るのみ。何の利益有らん。亦彼に去き、汝が古林和尚の一枝の仏法を外国に行なう可くんば也た好し。此乃ち仏天上に在り、余誑言せず。又た曰く、我の老大昏耄にしてすら、尚お且つ去かんと欲す。況んや汝後生、精明百倍にして、又た事事微妙なるをや。且つ聞くならく、彼の船一二年の間ならずして、必ず又た此に来る。就きて回るも亦た可なり。亦た汝に托して郷書を寄附せんことを望む。時に日本も亦た数人の彼に在る有り。

少林院明極和尚七周忌の普説〔竺仙録〕卷上、南禅寺語録〕によると、明極はこのとき径山の首座であった。径山の住持は、第四十八代の元叟行端で、至治二年（一三三二）から至正元年（一三四一）丈室で亡くなるまで二十年に亙り径山を離れることはなかった。明極を日本へ招聘する約束は以前に出来ていて、道案内の使者として専使となつたのが文侍者ということになる。その際に明極は、竺仙を同道しようと力めて説得し、一、二年もしないで帰ろうと思えば、それも可能だと説く。

余乃ち文等に問うて曰く、回るを得べきやと。文曰く、此の船一たび去るも、明年即便ち又た来る。但だ意に随うのみ。昔兀菴亦た回り、西澗回りて復た往く。但だ自ら我が国の好きを貪れば、自ら回らざるのみと、云云。文侍者は、兀菴普寧や西澗子曇の例をあげて説明する。

仏乗禪師曰く、我、此の土を覩るに、皆叢林無く、見て眼に上らず。今唯だ我が郷間のみ、尚お百丈在世の時に異ならざるもの有り。如し或いは信ぜれば、則ち同に往き一たび覩て回れと。又た曰く、西堂和尚の言是なり。当に去きて仏法を行なうべし。而今仏法の流れ東す。凡そ我が郷間、敬信せざる者無し。順縁にして行く、今正に是の時なり。大丈夫何ぞ自ら凝滞して、決せざるや。是より先昔普保寧に在り侍者為りし時、寮賓は両浙の郷曲の外に日本の三十二人有り。鳳臺老人見ゆる毎に、則ち之を戯れて曰く、此れ日本の国師なりと。又た曰く、汝若し誠に能く一たび往かば、則ち大いに彼を化さんと。余曰く、去くことは則ち辞さず、返ることを得ざるを

慮る。曰く、出家の児、縁に遇えば即ち宗す。何ぞ且つ此を慮ると。是に於て其の先言を感ず。固に戯るるのみ。而も又た誠なりと。

古林の下で同参の天岸は、日本の禅林では百丈懷海が在世の時と同じように規矩が行なわていることをいい、一度実見するように説く。また、西堂和尚つまり明極の言の真実なことを請け合い、竺仙の逡巡を鼓舞している。このようなことから、古林の戯言を思いだし、渡来を決意することになる。

それは天曆二年(一三二九)のことで、わが国の元徳元年に当る。五月福州の閩江の南江から船に乗り海を渡り、博多に着岸した。普通、わが国の商船の入港地は慶元であったが、竺仙らが出港したところは福州であった。このことは、泰定元年(一三三四)に「諸^{まよ}そ海船の至れば、止だ行省をして抽分せし」(『元史』卷九四、食貨志、市舶)めたことにより、海禁政策の緩んだことと関連しているであろう。

竺仙の外、明極と同船したものは、弟子の懶牛希融⁽⁸⁾、それに帰国する雪村友梅、物外可什・天岸慧広・不昧奥志(弟子)らである。この船上で詩が唱和され、その一つに「喜見山」(田山方南『禅林墨蹟拾遺』七五、以下『拾遺』と略称)と題して、唱和したものがある。

放洋十日竟無山 放洋すること十日 竟に山無く、

慚説平生眼界寛 慚説らくは平生 眼界の寛きを。

弱水誰言三萬里 弱水 誰か言う三万里と、

扶桑仙島照眸寒 扶桑の仙島 眸に照して寒し。

船上にあること十日たって、ようやく山を見ることができた。天岸を承けて、同じく山・寛・寒に押韻して、竺仙・物外・懶牛・字海・明極が唱和する。そのうち懶牛の詩に「明日午前 応に近づくべし」とあるのは、十一日目に博多に着岸することになるのを現わすのであろうか、それとも、五島列島に近づくにすぎないのであろうか。途中無風

圈に入って船が進まず苦勞した状況を、「無風に苦しむ」(田山前掲書『拾遺』七四)等からも窺うことができる。

一体、当時にあつて日本と中国とは、どれくらいの日数で結ばれていたのか。明使である無逸克勤らは、帰国に際し、大宰府から舟に登り、五昼夜で昌国州、すなわち明州(寧波市)に達している(『宋学士文集』卷二七、送無逸勤公出使還鄉省親序)。これは順風を得た場合のことで、普通は日本と中国の間で、平均十日の航海日数を要したといわれる(9)。とすると、竺仙らの乗った船は、平均に近く、無風状態を脱するまでの間、非常に長く感じたということであろうか。

明極の招請者は、いったい誰であろうか。「明極和尚塔銘」に、「日本国書幣を具え、国師の礼を以て迎う」とあることからすると、北条得宗である高時の名によって招聘されたと考えてよいであろう。

明極一行が博多につくと、豊後守護である大友貞宗は、竺仙を豊州万寿寺に据えようと思つたが、貞宗に近い僧達には、竺仙の大名が京師(みやこ)に達している以上、九州に留める訳にはいかないと論じている。かくして、元徳二年(一三三〇)二月には鎌倉に着き建長寺に留まつた。高時は竺仙を一見すると、以前からの知り合いのように歓談している。

明極は建長寺に住持となると、竺仙を第一座とし、修行者の指導責任者の役職につけている。安達時頭の子の高景は、明極の弟子となつており、竺仙を南禅寺に出世させて、明極に嗣法させようとしたが、竺仙は笑つてこの拜請を却けている。この事を知ると、貞宗は再度蔣山万寿寺に招聘しようとしたが、竺仙は赴任しなかつた。正慶元年(一三三二)高時は竺仙を浄妙寺に出世させようとする、高景は峻阻したが、高時は押し切り、竺仙を入寺させることになる。竺仙が嗣法の香を古林に炷くと、貞宗は慶賀したという。

足利尊氏(仁山居士)は、弟の直義(古山居士)と共に竺仙を尊崇し、その母上杉清子のために私第に招き、兄弟二人して近侍している。貞宗は建武元年(一三三四)亡くなると、遺命して再び万寿寺に拜請したが、足利氏は固く留め、綸旨により浄智寺に入寺させている。建武五年(一三三八)貞宗の子の大友氏泰は、父の志をつぎ、竺仙に三浦の

無量壽寺を兼務させた。竺仙は翌年には兼務を止め、疾と称して東堂に退居している。

右のような竺仙の事績を見ると、玉村竹二氏が考察されたように、明極の旅費は安達氏、竺仙のは大友氏が支弁したという説は首肯し得る。それを北条得宗の名でもって招聘したといつてよいであろう。あたかも清拙正澄の渡来にあたって、実際には大友貞宗が招聘の任につきながら、高時が名目上の招聘者となったのと揆を一にする。⁽¹¹⁾

暦応四年（一三四一）鎌倉淨智寺の楞伽院にあった竺仙は、直義に迎えられ光明天皇の綸旨により南禅寺に任ずることになり、かさねて光嚴上皇の院宣により四月十三日入寺した。七月二日尊氏は直義と共に入寺飯僧し、陞座説法を請うている。翌年、一旦退院したが、再住させられている。康永二年（一三四三）五月、光嚴上皇は南禅寺に臨幸し、竺仙と法談して大悦した。程無くして勇退すると、寺内に寿塔が建てられ、楞伽院と称された。尊氏は施田し香火料に資している。貞和二年（一三四六）二月、真如寺の命を受け、尊氏のために預修拈香を行なう。翌年正月廿日には直義の請により建長寺に入寺し、禅林の典礼に則つて運営した。貞和四年（一三四八）四月、疾により退院し、寮舎の布金館にいたが、七月には淨智寺の楞伽院に帰る。八日上杉憲頭が竺仙の疾を見舞い、それを関東公方であった尊氏の長子義詮に報告すると、義詮は翌日安房正木郷の田荘若干を楞伽院に寄捨している。亡くなったのは十六日のことであつた。

竺仙は鎌倉の極末に明極と渡来し、南北朝前期にかけて鎌倉・京都の地にあつて、五山等の官寺に住山して活躍し、大友貞宗・足利尊氏・直義らの外護をうけた。

三 金 剛 幢 下

古林清茂の墨蹟の一つに一幅の送別の偈がある（芳賀幸四郎『墨蹟大観』第一卷三二、田山方南『統禅林墨蹟』四二、以下

『統』と略称。

海國禪人道韻高

海國の禪人 道韻高く、

遠來湖寺豈徒勞

遠く湖寺に來つて豈に徒に勞せんや。

頂門眼活通天地

頂門の眼 活して天地に通じ、

塵刹三千在一毫

塵刹三千 一毫に在り。

日東運禪人聚首

日東の運禪人、湖寺に聚首

湖寺所存在道過人

す。所存道に在り。人に過ぐるの

之長非語默可及別去

長語默の及ぶ可きに非ず。別れて

江西出紙徵偈迅筆

江西に去く。紙を出して偈を徵む。

塞請峯

迅はやかに筆して請を塞ぐ。峯に

至治元年三月廿日

至治元年三月廿日

澹湖休居叟 清茂

澹湖休居叟 清茂

子休居金剛幢

子休居金剛幢

澹臺湖（江蘇省蘇州）の辺にあった寺に掛錫した天然興運は、古林のもとで所存の通り修行をやりあげ悟りを開いている。天然は嶮崖巧安の法嗣ということになっているが、この送別の偈からすると、真の嗣法は古林と違ってよい。古林は墨蹟を求められると、よく号の金剛幢の方印を押している。

中巖円月は竺仙の門弟である裔孫侍者の求めにより、竺仙に贊をして「金剛幢、随処に扶樹す」〔五山文学新集〕第四卷『東海一瀕別集』五二八頁）といい、古林の禪を随処に扶植したことをいう。義堂周信は石室善玖の求めにより、「石林・横川の諸老墨蹟の後敘」〔空華集〕卷十二）を書き、その中で石室のことを次のようにいう。

惟うに翁や、蚤に江南に遊び、晩に海上に帰る。大いに鳳臺の曲を唱え、高く金剛之幢を建て、益々玉几の正脈を通ず。謂つ可し、克く先烈を嗣いで、厥の家世を昌んにする者なりと。

石室が横川如珙の正脈を日本に流通し、鳳台山保寧寺の古林の法を打ち建てたことを称える。

義堂は「韻を次で建長の太和侍者の見を訪ぬるを謝し」(『空華集』卷二)ていう。

太和侍者來相訪 太和侍者 来って相訪い、

驚起岩間打睡僧 驚起す岩間 打睡の僧。

因話金剛幢下事 金剛幢下の事を語るに因って、

面前突出鳳臺層 面前に突出す鳳台の層。

金剛幢下、つまり古林の会下の事に話が及ぶと、面前に保寧寺が現出してきた。⁽¹³⁾ 太和侍者とは、その伝歴を詳らかにしえないが、金剛幢下の影響を被っているものである。古林の保寧寺の有様が彷彿とすることになる。

古林のもとで修行した人々は、日本に帰ってからも密接な交わりをもつことになる。『空華集』卷九に次のような七言律詩がある。

石室和尚の金竜庵に竹を種うるに次韻す。竹は乃ち楞伽庵の植うる所、蓋し一家なり。

分栽することは本と長竿の為にせず、

同盟晩に未だ寒からざるを見んと要す。

兄弟二難 皆俗を抜き、

往来三友 豈に官を求めんや。

籀竜並び出でて孫孫秀、

棲鳳双び儀きたって筒箇端ただし。

但し此君の能く客を引くことを得ば、

論ぜず永雪冷やかにして相看することを。

石室の寿塔である金竜庵に竺仙の楞伽庵の竹を植えることにより、古林の同じ法嗣である関係の緊密なことを象徴させている。このようなお互に往来して交友することは、同じ法を嗣いでいるからというだけではなく、古林に参じたことのあるものは、日本に帰ってからのちも風雅の交わりをもった。⁽¹⁴⁾

謝竺仙和尚訪

竺仙和尚の訪を謝す

窮巷晝長春睡驚

窮巷晝長くして春睡驚かし、

啾々軋々送嘉聲

啾々軋々として嘉声を送る。

停車麥浪隴頭立

車を停めて麦浪隴頭に立ち、

倒屣菜花籬外迎

屣を倒にして菜花籬外に迎う。

光寒里閭人改觀

光寒くして里閭の人 觀を改め、

澤流岩谷草生榮

沢流れて岩谷の草 榮を生ず。

瓣香欲走謝臨屈

香を瓣じ走って臨屈を謝せんと欲するも、

争奈已成蓮社盟

争奈せん已に蓮社の盟を成ずることを。

これは中巖が竺仙の訪問を謝したものである(『五山文学全集』第二卷八九四頁『東海一漚集』卷一)。竺仙のきたのを喜んでいる様子が伺える。建武四年(一三三七)冬、淨智寺の竺仙は中巖との旧交の厚きにより前堂首座に任じている。⁽¹⁵⁾ 彼らの交わりは、中巖が古林に参じた泰定三年(一三二六)春か、四年秋にまで溯って考えることができる。⁽¹⁶⁾

元応二年(一三三〇)から至順元年(元徳二年、一三三三)にかけて中国にあった別源円旨は、鳳台の古林・天童の雲外雲岫・天目の中峰明本・本覚の靈石如芝・華頂の無見先觀・東林の古智慶哲・円通の竺田悟心・妙果の南楚師説・龍

岩の徳真・般若の絶学世誠らを参訪している。このうち古林には最も久しく親炙し、江湖を徧遊したのち、再び保寧寺に帰り知識の職に任せられている。古林が別源に与えた送別の偈の墨蹟がある（田山方南『禪林墨蹟』七〇、以下『禪林』と略称、芳賀前掲書第一卷二九）。

旨禪三年預吾席 旨禪三年 吾が席に預かり、

三十烏藤拵得 三十烏藤 拵得して喫す。

喫念渠遠自日東 念うに渠遠く日東より来たり、

来一片真心如鐵 一片の真心 鉄石の如し。

石此棒不打亦不 此の棒打たず 亦た知らず、

知待渠自會知幾 渠の自会するを待つ 知んぬ幾時ぞ。

時衲衣脱下痛一 衲衣脱下 痛く一頰せば、

頰他年堪作吾 他年 吾が家の児と作すに堪えん。

家児

日東旨禪人有志 日東の旨禪人に志有り。

於道聚首三年 道に於て首を聚むること三年、

見於日用需遊語 語遊 日用に見わる。語を需めて

江西礼祖迅筆為 江西に遊び祖を礼せんとす。筆を迅めて

書岩 為に書す。岩に

泰定二年九月二日 泰定二年九月二日

金陵鳳臺 清茂 金陵鳳台 清茂

沙門 休居 金剛
清茂 子 休居 金剛

沙門 休居 金剛
清茂 子 休居 金剛

古林のもとでの別源の徹底した修行を伝え、将来の嗣法の期待をこめて書いている。しかし、別源は東明慧日の法を嗣いだ。わが国では嗣法の自由さはあまりなく、受業師に嗣法するものが多く、寂室元光のごときは、中峰明本の印可を受けているが、⁽¹⁷⁾受業師の約翁徳儉の法を嗣いでいる。別源はわが国に帰って後も竺仙を訪問したり、詩の唱和をしたり、書簡を出したりして交友を持っている。⁽¹⁸⁾

不聞契聞は廿五歳(一三三六)から卅三歳(一三三四)の間に、華頂の無見先親・靈隠の東嶽徳海・浄慈の靈石如芝・月江正印・断江寛恩・竺元妙道、そして金陵鳳台の古林に参して、心要を咨決している。竺仙は「白雲庵主に寄す并びに引」(『竺仙録』卷下之下)に次のようにいう。

昨者まきに辱まじくも訪われて、共に磨礪する所の崖石上に遊視す。語心の二字を作さんと欲して、今已に之を成す。因まって便ち四句を成す。願わくは一笑を發せんことを。復た料るに中巖此を見ば、其の忍俊亦た豈に能く禁せんや。

黙共虚空閑語心 黙して虚空と共に閑に心を語り、

分明入石已三分 分明に石に入ること已に三分。

世間無一匪側耳 世間一も耳を側てざる無く、

未審白雲聞不聞 未審し白雲聞くや聞かずや。

四句目からすると、この時の白雲庵主は不聞契聞とみてよい。日本に帰ってからも竺仙と不聞は、密接な交流を持った。

古林に甚だ器重された天岸慧広は、先に見た在元中のみならず、帰国後も竺仙と変らない交友が続き、竺仙は天岸が浄妙寺に出世した際には、道旧の疏や山門の疏を書いている。

遠く澹臺湖の辺の寺に住する古林のもとにやって来た別伝妙胤は、虚谷希陵の法嗣ということになっているが、古林の影響も強く受けているとみてよい。⁽¹⁹⁾ 竺仙は別伝が越後の普濟寺に出世した祝賀の偈頌の題に同門という語を用いて同じ金剛幢下の別伝に祝意を表している『來々禪子東渡集』。また、竺仙は別伝が横洲の泊船庵に住すると、庵に足を運んでいる。

元亨二年(一三三二)から天曆二年(元徳元年、一三二九)にかけて古林に師事した月林道皎は、入元した当座は筆談のこととした。⁽²⁰⁾ 泰定四年(一三二七)に古林が月林に与えた法語(田山前掲書『統』四〇、芳賀前掲書第一卷三二)がある。

月林皎蔵主、遠く海東を離れ、南来して道を問ひ、予を鳳台に訪う。至治二年自り泰定四年に至るまで、凡そ三たび吾が室に入り、所得大いに前に過ぐる者有り。其と語れば終夕倦まず。嘗て之に謂いて曰く、此の宗其の妙を得ること難し。直に須らく子細に心を用うべし。将来座を得て披衣せば、此の書に幸かざるに庶し。之を勉めよ。既に前偈を書して贈と為す。復た数語を後に贅すと云う。

泰定四年九月旦日、氷雪相看の室に書す。

休居老僧 清茂

休居
鳳峰
直下
金剛
幢

この段階で月林の參禅弁道がかなり進んだことがわかり、古林の期待の大なるものがある。かくして、古林の旨に契い、天曆二年(一三二九)には鳳台で分座説法することになる。⁽²¹⁾ 竺仙は法弟の月林に次の偈を寄せている『竺仙録』巻中、大梅皎首座の拈古頌古を閲し之に寄す。

已聞梅子熟多時 已に聞くならく梅子熟すること多時、

無數黃金綴滿枝 無數の黄金 滿枝に綴る。

可惜無人能下口 惜む可し人の能く口を下すこと無きを、

大堰止渴與充飢 大いに堰う渴を止むると飢を充たすに。

梅子、すなわち大梅山長福寺の月林の修行の出来上がってからこれまでの金口を称え、人の口の端に上らないことを残念がっている。

正中・嘉暦の間に天岸慧広ら同志と共に入元した物外可什は、保寧の古林・本覚の靈石・鶏足の清拙に謁したものと考えてよいであろう。⁽²³⁾とすると、「休居老人の韻を賡いで物外首座に寄せた」(『竺仙録』巻下之下)偈頌も、同じ金剛幢下のこととして理解できる。

文保二年(一二二八)に古先印元らと入元し、泰定三年(一二三六)に清拙と同船して帰国した明叟齊哲は、⁽²⁴⁾中峰の法を嗣いでいるが、古林にも参じ墨蹟「警策」(田山前掲書『拾遺』七七)を与えられている。明叟は竺仙が冷泉にいた時からの旧い知り合いであり、⁽²⁵⁾竺仙を建長に訪ねて誼を結んでいる。竺仙が書いた明叟の真如寺に住する祝賀の偈はよく知られている。⁽²⁶⁾

靈江周徹は、竺仙の法兄であって、南詢から帰って以来、相見してはいなかったが、暦応四年(一二三二)鳳台老人の頂相を携えてきて竺仙に与えている。⁽²⁷⁾長く古林に師事し蒙を発くことが多かったといわれる。しかし、帰国すると夢窓の法を嗣ぐことになる。

徳治二年(一二三〇)入元した雪村友梅は、雪川の下獄と長期にわたる配流のあと、古林にも参じ、偈を送られている。⁽²⁸⁾天暦二年、明極・竺仙らと同船して博多に着岸した。朝命があり、足利尊氏や直義により京都の万寿寺に拝請された際、雪村は病氣ということで入寺を断ったのに対し、竺仙は偈をよせて命を受けるよう勧めている。⁽²⁹⁾

大徳十一年(一二三〇)の慶元の倭商事件により天童寺も日本僧の搜索をうけた。その際に、龍山徳見も逮捕され大都に送られている。のち蘇州に行き虎丘山の東州寿永、その紹隆の塔主である古林に参じ、龍山は古林に道韻あるものとされている。龍山は竺仙の没後に帰国しているから、わが国での交流はない。同じ金剛幢下の中巖は、中国の地

において龍山の教えを受けている。⁽³⁰⁾

文保二年(一三二八)入元した古先印元は、金陵鳳台の古林のもとでは雪隠(東司)の役を掌っており、⁽³¹⁾竺仙とも親交のあったことと思われる。泰定二年(一三二五)清拙正澄の再三の懇請により同船して帰国した。

孤峰覚明は応長元年(一三一)渡海すると天目の中峰に参じ、のち古林らに見えている。

大智は正和三年(一三一四)入元すると、最初に古林に謁し、そのあと雲外雲岫や中峰・無見らに歴参して、泰定元年(一三三四)に帰る。

嵩山居中は文保二年(一三二八)再び入元すると、古林を永福寺に、雲外を太白に謁している。蔣山の曇芳守忠のもとでは第一座に挙げられ、虚谷希陵らに見えて至治三年(一三三三)東帰した。

元応二年(一三三〇)寂室元光は、可翁宗然らと共に中国にわたり、直ちに天目山の中峰に参じている。共に保寧の古林らにも参じた。

元応年間(一三一九-二二)に入元した大朴玄素も、中峰や古林らに見えている。

平田慈均は入元すると、直ちに金陵鳳台に行き古林に参じている。

古林に「清禅人、参禅の志、頗る古人の風有り」(田山前掲書『拾遺』八〇「無夢一清に与うるの語」といわれた無夢一清も、彼に参じている。

竺仙が淨妙寺に住していた時、寂曇西堂は古林から「海東の曇侍者の浙に入るを送る」(『古林拾遺偈頌』卷上)という法句を与えられたものを高麗で失ってしまったと語り、それを口誦し筆記させている。

泰定三年(一三三六)古林は、偉山了偉のために号と、その偈を賦している(田山前掲書『統』二五六)。

古林が泰定三年に曇幽に送った偈には、雲門の一字の関を透過し大自在の境涯に到るように努めよと、勧めている

(田山前掲書『禅林』七二、芳賀前掲書第一卷三三三)。

以上、金剛幢下の人々を竺仙を中心に見てきた。その他の古林の会下も、当然日本に帰ってからもそれぞれ深交を結んでいる。たとえば、天岸慧広『東帰集』(『五山文学全集』第一卷一九頁)に「普濟の胤別伝の韻に和す」の偈がある。

經歷南方已復來 南方を經歷して已に復た來たり、

同聲同氣在忘懷 同聲同氣 忘懷に在り。

越山耆宿僧千歲 越山の耆宿僧 千歲、

竺國雲遊老萬回 竺國雲遊す老万回。

應世因緣隨處合 応世の因緣 隨處に合し、

知春時節自東催 春を知る時節 東より催す。

效他一力能槌鼓 他の一力能く鼓を槌つを効し、

開發沈惰震法雷 沈惰を開發して法雷を震う。

天岸と別伝妙胤とが氣脈を通じている有様がわかる。龍山徳見の行状は、門人の慈船が中巖と龍山との旧好の稔から中巖円月に執筆を依頼している。また、中巖は不聞契聞を「吾が友不聞子」といい、「常棣兄弟を燕し、吾が心樂しみ且つ妯^たしむ」(『東海一漚集』「答不聞」『五山文学新集』第四卷三三三頁)と、『詩經』を引用して、兄弟(中巖・不聞)の和樂の情を歌っている。古林に参じた会下の人々の交友の一端が偈頌や行状執筆の経過を通して了解できる。

四 士大夫としての竺仙

金剛幢下の中心的存在である竺仙は、先に見たように、将来、士大夫階級に属する可能性のある教育を受けている。しかし、彼の性行は仏教界に向いていて出家することになる。とはいっても、寺院での修道の間にあっても、古典の

勉強も続けられたとみてよい。四十九歳(暦応三年、一三四〇)の時に弟子の裔芝に与えた自贊は、次のような偈頌で作られている(『竺仙録』卷下之下、天柱集)。

日日思歸未得歸 日々帰ることを思うて未だ帰ることを得ず、

誰云四十九年非 誰か云う四十九年の非と。

夜來夢見迦文老 夜來夢に迦文老を見るに、

把手風前歌式微 手を把り風前に式微を歌う。

『詩経』邶風、式微序を踏まえてこの自贊は詠まれている。なお、この自贊からすると晩年に「思歸叟」とも号したことは、故郷の中国に帰りたいという思いを号に託したといえよう。士大夫の条件の一つである古典の素養は、自贊でもって首肯できる。第二の作詩作文の能力は、『天柱集』『来々禅子集』『来々禅子東渡集』等の作品が、それを証明しているといえよう。これらの二つは人文的教養にあたる。

第三の条件は、治国平天下の使命感があるかどうかということ。これは仏教が政治と対極をなすものであるから、本来はないのが理想的だといえようが、現実の政治から超然とすることができないから、その意識ぐらひは探ることができよう。ましてや宋以後の君主独裁体制下にある社会に生を受けたものとしては、国家権力との調和をどうするかという教団の課題があるわけだから竺仙個人にとっても考えざるを得ないであろう。竺仙は浄妙寺に住していた時、北条氏の滅亡とその後の内乱に遭遇し、乱後の上堂を行なっている(『竺仙録』卷上)。

僧問う、天は一を得て清く、地は一を得て以て寧く、君主は一を得て天下和平。正恁麼の時、如何が提唱せん。師云く、斬新の日月、特地に乾坤。

『老子』第三十九章によりつつ、最後の「侯王は一を得て以て天下の正まことを為す」を問答のように変えている。竺仙は僧の質問に対して一を得たものが新しく天下を平定し得ると答えているのである。鎌倉末から南北朝の内乱期に

五山に住した竺仙にとっては、治国平天下の問題から目を逸らすわけにはいかなかったといえるであろう。

士大夫としては必須の条件ではないが、これに尚雅の精神、芸術に秀でた面を持つと、理想的な士大夫階級に属する人といえよう。竺仙の書法については、黄山谷流の書法が入っていて、潤達で力量感のある点で他の追随を許さないといわれる（田山前掲書『禅林』四二）。筆者不詳の維摩居士図に中巖円月が賛をしているものがある（島田修二郎・入矢義高監修『禅林画賛——中世水墨画を読む——』41横田忠司執筆）。その賛によると、「五葉庵□老禅伯、手に竺仙図する所の像を持す」とあり、竺仙の画いた像があったことがわかる。

わが国は中国から様々な文物を移植し自家葉籠中のものとしたが、科挙制は受容しなかった。したがって、士大夫階級そのものはわが国にはない。士大夫に類する階層に当るものが、五山を中心とした禅僧といってよい。竺仙は士大夫層に類する条件にびたりと該当する一人といってよい。金剛幢下の一人一人については、竺仙のように理想的に士大夫層として位置付けることは出来得なくても、古林を始めとして多くの禅家に長年月に互り師事している点からいって士大夫としての教養を備えていたといつて大過ないであろう。

おわりに

五山文学の創始を、私は掛搭志願者を偈頌の試験によって選抜した一山一寧のところに置きたい。⁽³³⁾その播かれた種を育成する働きを為したのが、竺仙を中心とする金剛幢下の人々であった。竺仙が保寧の侍者であった時、そのもとには三十二人の日本人がいた。そのうちの一人が中巖円月であったといつて間違いないであろう。そういう因縁から、竺仙は中巖を浄智寺の前版に任じている。翌年、中巖は竺仙のもとで乗拂を行なった。この中巖に義堂周信は教えを受けていて、⁽³⁴⁾『空華集』には序を書いてもらっており、更に跋語を求めている。春屋妙葩は、竺仙が浄智寺の住持と

なった時、書状侍者となり、以後竺仙の会下に列なることになる。この春屋に絶海中津は雲居庵において沙彌教育を受けている。間接的ながら義堂・絶海は、竺仙の学系に列なっているといえる。またこの二人は、建仁寺の龍山徳見の高風を慕い師事している。とすると、竺仙を中心とする金剛幢下の偈頌主義は、義堂や絶海といった五山文学の双壁へと継承されていることになる。

科挙に基づく大量の士大夫階級の出現は、宋代の印刷技術の発展が齎したともいわれる。それと同じように、わが国の禅林における読書人の底辺拡大は、五山版の出版によっての事といえよう。この五山版が出されていく芽ばえの役割を担ったのが竺仙であり、それを受け継いだのが春屋である。この五山版への展開、大友貞宗を始めとする竺仙の外護者、それに竺仙の法嗣については、後の宿題とする。

弟子の裔翔侍者と作詩や作文について竺仙は問答をしている（『竺仙録』巻下之上）。そのなかで竺仙は、学道を本とし、文章をこれに次ぐものとして、文は修道を助けるものと位置付けている。その彼に、『日本禅林撰述書目』（『大日本史料』六編之十一、貞和四年七月十六日の条）によると、『損益清規』がある。学道を重んずる竺仙に清規があるということは、五山文学の形成に大きな足跡を踐してはいるものの、禅林社会の本分が奈辺にあるかを示して貴重なものといえる。残念ながら散佚していて、その内容について確かめようがない。

モンゴル襲来後、朝鮮半島や中国で倭寇の活躍が目立つようになってくる。これに対し、当然その取り締まりをわが国は要求されることになる。また、明朝の成立により、その冊封体制下に入って朝貢形式によってのみ貿易が許されることになる。ここにわが国は、明朝や李氏の朝鮮と公的に交渉を持たざるを得なくなる。そこで、室町幕府は、外交文書の作成、対外折衝のできる外交官の調達を自前で行なわねばならなくなった。これらはその必要に迫られたからといって、短期間のうちに用意できるものではない。幸いにも幕府の周辺には外交官として期待し得る知的教養集団があった。それは外でもない五山の禅僧達である。外交官としての五山僧については、稿を改めて論ずることとする。

注

- (1) 徽宗の時代、王安石の三舍法は地方にも及ぼされ、州学・県学が地方に建てられた(宮崎市定『アジア史研究』第一、三六八頁)。
- (2) 牧野修二「元代の儒学教育」(『東洋史研究』三七卷四号) 参看。蕭泰登は、九歳になると郷校に入り、『論語』を習っている(『清客居士集』卷三四、蕭御史家伝)。
- (3) 拙稿「元代における童行について」(『花園大学研究紀要』六号) 参看。
- (4) 拙稿「元朝における中峰明本とその道俗」(『禅学研究』六四号) 参看。
- (5) 『来来禅子東渡集』「祭仏性和尚」
- (6) 田村実造『中国征服王朝の研究』下、三五三～三五六頁。森田憲司「元代前半期の碑刻に見える科挙制度用語」(上)(『奈良大学紀要』十一号) 参看。
- (7) 大正本・大日本仏教全書本の『竺仙録』は、共に「若能化仙公共住(行矣)」とするも、大谷大学図書館架蔵(文政十年春、謙巖住山記念に贈られた写本)本によって「住」を「往」に改める。
- (8) 天岸慧広『東帰集』「明極和尚滄海余波序」(『五山文学全集』第一卷三五頁)に、「嘉暦己巳、遙に海外の請に趣く。相従う者三、四明の竺仙・台の融懶牛等なり」とある。
- (9) 佐久間重男「明初の日中関係をめぐる二三の問題」
- (10) 『北海道大学人文科学論集』四号) 参看。
- (11) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』竺仙梵僊の項。
- (12) 拙稿「日元における清拙正澄の事績」(『日本歴史』四三〇号) 参看。
- (13) 竺仙は裔孫侍者の求めにより自賛して『竺仙録』巻中、「萬福大王由昔日、流傳今古亦悠哉。師資心膽即者是、何用丹青生面開。」という。
- (14) 筆者不詳の「繩衣文殊図」に石室が賛を次のようにしている(島田修二郎・入矢義高監修『禅林画賛——中世水墨画を読む——』20)。
- 満頭雲鬢三千丈
梵夾捉持被草衣
大智洞明瞞吉甫
臺山風雨騎驢歸
金龍老比丘善玖爲
福山忠侍者敬贊
- 金剛 室石
幢下
- (15) 古林の会下であることを示す金剛幢下の方印をあたかも号のように用いている。
- (16) 玉村竹二『日本禅宗史論集』上・八七八頁、一〇三三五頁、下之一・二九九頁、下之二・一三三三頁等参看。
- (17) 『中岩月自歴譜』建武四年丁丑の条(『五山文学新集』第四卷六二〇頁)。
- (18) 保寧寺で古林に参じた頃中巖は、同参の中国僧の中で

- 孤立し、望郷の念に駆られている（蔭木英雄「中国に於ける中巖円月の詩」『中世日本の禅とその文化』所収）。
- (17) 拙稿「元の幻住明本とその海東への波紋」『日本歴史』四六一号）参看。
- (18) 別源円旨『東帰集』「淨妙の竺仙和尚に簡す」『五山文学全集』第一巻七七頁）に、「子の帰來し稱荷に参ずるを欣び、山中の法道近ろ如何ん。精神長へに会す形骸の外、半副全封し多くを用いず。」とある。
- (19) 『東海一漚別集』「別伝和尚」『五山文学新集』第四巻五二七頁）に、「^{成谷彦徳}仰山の禅に参じ、別に伝うる所無し。栗棘の蓮を呑み、金剛圈を透る。扶桑に帰來して、四たび道場に坐す。妙に長剣を帯び、鋒鋭を犯さず。」とある。
- (20) 『大日本史料』六編之十四、観応二年二月廿五日の条。
- (21) 田山方南『禅林墨蹟拾遺』八二、仲謀良猷墨蹟 月林道皎に与うるの語。
- (22) 木宮泰彦氏は、『日華文化交流史』（四六四頁）において、天岸らの入元を正中二年（一三二五）のことであるとされる。さきに見た「仏乗禪師十三年忌辰陞座」に、泰定三年、竺仙は天岸とあっているから妥当な説といえる。
- (23) 『本朝高僧伝』卷二五、天岸慧広伝。
- (24) 拙稿前掲論文「元の幻住明本とその海東への波紋」参看。
- (25) 『竺仙録』卷中、哲首座に送る并びに序。
- (26) 田山方南『禅林墨蹟』四二、芳賀幸四郎『墨蹟大観』第一巻五一、『日本の美術』五号『墨跡』第六六図。
- (27) 『竺仙録』卷中、靈江徹侍者に答う并びに序。
- (28) 小野勝年『雪村友梅と画僧愚中』には、雪村の中国での動向が詳説されている。
- (29) 玉村竹二『五山詩僧』『日本の禅語録』八）参看。
- (30) 拙稿「鎌倉期における渡來僧をめぐって」『日本歴史』四九一号）参看。
- (31) 『東海一漚別集』『五山文学新集』第四巻五二八頁）「古先和尚」に、「鳳皇台に遊び、鳳皇の哺を甘受せず、師子岩に登り、乃ち肯えて師子の児と做る」とある。
- (32) 士大夫の条件については、村上哲見「文人・士大夫・読書人」『未名』第七号）参看。
- (33) 拙稿「元朝国信使寧一山考」『日本歴史』五〇九号）参看。
- (34) 玉村竹二『五山文学』一〇一頁。
- (35) 春屋らは竺仙の淨智寺語録を纏めている。なお、春屋と外交とのかかわりについては、村井章介「春屋妙葩と外交——室町幕府初期の外交における禅僧の役割——」『アジアのなかの中世日本』所収）がある。
- (36) 古林が提唱し、金剛幢下の人々に継承された「偈頌主義」の運動は、玉村竹二氏の名付けられたものである。